

東京都現代俳句協会会報

発行人 青木 栄子
発行所 東京都現代俳句協会
〒116-0014 荒川区東日暮里3-34-10
山本 敏倅
TEL-FAX 03-3801-1656

俳人のあなたに

副会長 山中 正己

初学の頃、先輩から「君は俳人か？」と問われた。「俳句愛好者です」と答え「俳人名乗る条件は？」と問い返すと

- ①何でもいから俳句で賞を取ることを。
- ②十年位経ったら句集を作り世に問うこと。
- ③歳時記のすべての季語に挑戦すること。
- ④そして毎日必ず俳句を詠むこと。これが最低条件だと宣った。

逆らわずそれから、新聞、雑誌、テレビ等に投句を試み、若干の入選を得て賞金賞品等も頂いた。句集も幾度か刊行した。歳時記はほぼ毎日手に取り、必ず俳句を詠んでいる。しかしながら、自ら俳人と名乗るのは気恥ずかしい。無職、年金生活者と名乗るわけにも

いかないから、これから俳人を使おうかとも思っている。

さて、昨年十一月二十三日現俳創立七十年記念大会が帝国ホテルにおいてにぎにぎしく行われた。詳細は会報「現代俳句」に紹介されたので省くが、当日の講演、シンポジウムにおける季語についての宇多喜代子先生の講演、著名俳人らの議論が興味深かった。特に歳時記について「郷愁に絶るわけではないが、わが郷愁の言葉、歴史であり、フィクションを誘い出す仕掛け。わが記憶再生装置だ」の論調に、わが意を得たりの思いであった。過って、小川軽舟氏が「作句の始めにウォーミングアップとして当季の歳時記をめくり季語の本意と例句を暫く眺めている。すると様々な記憶と思いが湧いてくるのです」と語っておられた。以来私も実践している。

俳句甲子園やプレバトで人気の夏木いつきさんの切れのよい語り、穏かで柔軟な岸本尚毅氏、生真面目な渡辺誠一郎氏と小林貴子さん、手際よき神野紗希さん、それぞれの特徴も身近に感じられるいい企画だった。会費二万円の祝賀ディナーも美味なコーストビーフなど、皆さんご機嫌だったな。

さて、今年には都区協創立三十五周年記念大会が開催される。

①俳句大会作品募集 二句一組千円何組でも可未発表に限る。(会員外の応募も歓迎)

近年、都区協では春季秋季の吟行会、春夏秋冬の高田馬場句会、四つのブロックの吟行会が催されているが、皆さんの熱心さと実力向上には驚かされる。みなさん誘いあわせの上多くの応募を期待している。

②協会賞作品募集 新作未発表作品二〇句(都区協会員に限る)

③記念大会 平成三十年五月二十六日(土) さあ、実力俳人のあなたもぜひ挑戦しよう。

◆入賞作品発表

◆宮坂静生会長の記念講演

●祝賀会 椿山荘の馳走あり、御期待あれ。

東京都区現代俳句協会創立35周年記念俳句大会

作品募集

俳句大会作品

□募集規定 二句一組 一、〇〇〇円

何組でも可・新作未発表作品に限る
前書き不可・所定用紙または二〇〇
字詰原稿用紙使用。住所、姓号明記
出句料は出句と同時に納金する。

●会員外の投句歓迎

□送り先 〒一三五〇〇六一 東京都江東区
豊洲五十二番一〇四 栗原節子方
都区協三十五周年記念俳句大会係

□締切 平成三十年一月末日
当日消印有効

□大会日時 平成三十年五月二十六日
(土)

俳句大会 午後二時～五時まで
祝賀会 午後五時三十分～七時三十分

会費 六千円

□発表 都区協創立三十五周年記念祝
賀俳句大会席上、都区協「会報」。

□賞 現代俳句協会賞 都区現代俳句
協会賞 東京都知事賞 ふるさとテ
レビ賞 他得点一位より五十位まで

□講演 現代俳句協会会長・「岳」主宰
宮坂静生先生

演題 (未定)

(小為替の受取人欄は記入しないで下さい。)

★応募規定に違反した場合は、発表後でも入賞を取り消すことがあります。

東京都区現代俳句協会賞

□募集規定 二〇句

参加料二、〇〇〇円
新作未発表作品に限る

応募資格 都区協会員に限る

□入賞 一名 賞金五万円及び賞状

佳作 若干名 記念品及び賞状

□締切 平成三十年一月末日
当日消印有効

□発表 都区協創立三十五周年記念
祝賀俳句大会席上、都区協「会報」

□選考委員
長峰竹芳 松澤雅世 行川行人
松井国央 山中正己 佐怒賀正美
青木栄子 加藤光樹 加藤瑠璃子
中村和弘 大牧 広 松田ひろむ
鈴木 明 池田澄子

□送り先 〒一七一一〇五一
東京都豊島区長崎一―九―一四
山中正己方

東京都区現代俳句協会協会賞係

東京都区現代俳句協会

創立三十五周年記念俳句大会

期 日 平成30年5月26日(土) 午後2時より

場 所 文京シビックセンタースカイホール

☎03-5390-1122

記念講演 講演 現代俳句協会会長
「岳」主宰 宮坂静生先生
演題 (未定)

講 評 長峰竹芳常任顧問ほか

東京都現代俳句協会

創立三十五周年記念事業基金

募集のお願い

平成三十年に記念祝賀大会を開催いたします。

つきましては左記の通り基金を募集することになりましたので、会員各位のご理解とご協力をお願い申し上げます。

一口 一、〇〇〇円(何口でも結構です)

記念大会実行委員長 松澤 雅世

振込番号

00110・5・539619

加入者名 東京都現代俳句協会

*同封の振替用紙をご使用願います。

郵便振替払込受領証にて領収書に代えさせていただきます。

基金担当 松澤 雅世

創立三十五周年記念事業基金寄付者芳名

(十一月三十日分まで・敬称略・順不同)
「ご支援」ご協力を深謝申し上げます。

三十口 大平 星雲 松澤 雅世

二十口 松田 貞男 鈴木 明 二村 博三 長峰 竹芳

渡邊 嘉幸 櫻木美保子 小高 沙羅 吉田 健治

十口 阿部 晶子 佐怒賀正美 石山 正子 遊佐 光子

渡邊きこ子 石井 英彦 中本 勝美 大坪 重治

大牧 広 渋谷 京子 青木 栄子 林 晁兵

齋藤 藍 石垣 久良 布施 徳子 山中 正己

今野 龍二 赤木日出子 対馬 康子 柳瀬 亜湖

山本 敏梓 鈴木 明 伊藤 三三子 赤城日出子

五口 丸山ふさ子 橋本 道子 中村 里子 小倉山繁子

宇佐美ちよ子 北村眞貴子 長谷川はるか 丸山ふさ子

松本 秀紀 関根 誠子 吉浜 青湖 富山 孝道

高橋 透水 行川 行人 篠 貴美子 加藤 光樹

上野 貴子 西本 明未 大橋 愛子 山口 榮

石口りんご 菊地 雅子 赤澤 敬子 角田 晴俊

栗原 節子 大山実知子 吉田 孝子 石綿 久子

千明 素子 白石みずき 宮崎 敦子 川名つきお

山口 紀子 佐藤 洋子 松隈しのの 北村眞喜子

千明 素子 芦川 りさ 富田 花舟 小林貴美子

柳瀬 亜湖 好井 由江 鈴木登代子 平田 恒子

鈴木 光子 安田 淳子 池田 澄子 桑田 真琴

河原 叔子 鈴木 淳一 宮原 光女 倉持留美子

加藤瑠璃子 速水 禰子 遠藤 久子 栗田希代子

平林 孝子 高原 信子 相沢 幹代 阿部 周二

鎌守 裕子 上村ツネ子 鷲 ケイジ 古谷あやを

三輪 初子 伊藤 淳子 次山 和子 関 文子

石川 貞夫 穴澤 篤子 山戸 則江 永島 靖子

小平 湖 江原 玲子 白岩 絹子 畑乃 武子

吉田 克子 高島正比古 伊藤 三三子 岡野 順子

中村 三郎 栗原かつ代 諏訪部典子 岸本 陽子

二口 壁谷 瑠宇 磯部 薫子 中道 秀和 すずき小袖子

内藤みのる 長谷川栄子 寺町志津子 小林 幹彦

川西茜舟女 タイゴ鉄哉 いまじれ高夫 加藤千恵子

宮川 夏 古谷あやを 渡部 愛子 大橋 愛子

塚越 美子 棚橋 麗未 北村眞喜子 五十嵐迪子

倉本 岬 菊池ひろこ 菱沼多美子 讚岐 幸江

進藤 清能 伴場とく子 長尾 幸子 渡部 愛子

中内 火星 菊池ひろこ 利光知恵子 石堂つね子

鈴木登代子 山地春眠子 渥美人和子 田中いすず

一口 大高 宏允 大高 洋子 瀬川 紅司 平北ハジム

仲澤 輝子 蔦 悦子 吉田 慶子 中野 英子

朝賀みどり

Dブロック吟行会

十月九日(月・体育の日)

東久留米竹林公園・落合川から多門寺

絶好の吟行日和に恵まれた十月九日、朝十時西武池袋線東久留米駅に四十四名が集合。先ずは一日一万トンの湧水があると言う落合川の清流に添って多門寺を目指した。真言宗の古刹である多門寺では弘法大使像のお迎え、暫しの休憩で後発隊と合流。落合川の対岸を通って竹林公園へ。散策の後、それぞれ駅の近辺で食事。午後一時予定通り句会開始。

講話は今村たかし幹事による「森澄雄」の興味深い話を聞いた。(講話の要旨は別掲)

《特別選者・特選句》

松澤 雅世 特選

竹林のいまどのあたり小鳥来る 増田萌子

佐怒賀正美 特選

秋川に生きてポプラは百年目 ダイゴ鉄哉

山中 正己 特選

変身願望からす瓜になるか 佐々木克子

青木栄子・松田ひろむ 特選

肉食べて歩こう木瓜の返り花 栗原かつ代

ダイゴ鉄哉 特選

歯並びのいい風が吹く水の秋 石口 榮

《参加作品》 高得点二十位・以下順不同

1 歯並びのいい風が吹く水の秋 石口 榮

2 肉食べて歩こう木瓜の返り花 栗原かつ代

3 セセラぎの雲を跨いで竹の春 櫻木美保子

4 さつきまでさびしかつたが竹の春 小高 沙羅

5 葉鶏頭毘沙門天のまなこ炎ゆ 鈴木 光子

6 変身願望からす瓜になるか 佐々木克子

7 水澄むや核を持たない水の星 小林 和子

8 この世から少し離れて竹の春 白石みずき

9 清流に犬遊ばせて秋暑し 長谷川はるか

10 川に沿う日々の片々小鳥来る 今野 龍二

11 これよりは結界烏瓜ふたつみつ 古川 塔子

12 竹の春うしろの闇がチチと啼く 山本 敏倅

13 かぐや姫いたかも知れぬ竹の春 橋本 睦子

14 移りゆく記憶のくびれ秋の川 佐怒賀正美

15 竹落葉踏んで潮騒より淋し 青木 栄子

16 飛石を二三と竹の春 倉本 岬

17 水澄むや水草水にしたがひて 上野 英一

18 糞虫の糞どうみても日本製 小平 湖

19 竹林にぽつんと秋の人となる 松澤 雅世

20 芋の葉の倒れた土に子が育つ 鈴木 砂紅

神無月水位をなめる風に音 栗田希代子

竹林は秋落武者のけはいする 鎌守 裕子

種採れば若き記憶のよみがへる 永井 良和

多聞寺に人そのこゑ秋気満つ 山中 正己

秋天に餡パンひとつ雲ほしい ダイゴ鉄哉

竹林に会し清談秋の声 近田 吉幸

竹の葉の零す秋光多摩日和 広田 輝子

手をとつて渡る小流れ澄みにけり 山口 紀子

川沿いの遠浅な意気秋の蝶 西本 明未

四脚門多くをさかぬ秋の蜘蛛 中内 火星

ほんとうの犬かきの犬秋の川 五十嵐秀山

はにかみの童の狐面竹の春 江原 玲子

蜘蛛の巣は蜘蛛の感性多種の秋 長尾 幸子

手のひらのみぞ蕎麦指紋渦巻いて 増田 萌子

名も知らず木立のトンネル烏瓜 板橋 君江

天からの鳥の声ふる竹の春 石田 弥生

おんそわかこ湧水の竹の春 松田ひろむ

六地藏にやわらやわらにくる秋陽 石口りんご

竹林に小狐コンと秋の風 宮川 夏

多聞寺の南無観世音秋の蝶 大山実知子

飛石を渡る勇氣や秋の川 今村たかし

はじめての町の川音烏瓜 赤澤 敬子

赤い緒のきつね現わる竹の春 石井 誠子

一町の竹林囲ふ秋の水 楠 真一郎

(小高 沙羅・記)

森澄雄の世界

—いのちをはこぶもの—

森澄雄はよく、「俺は俳人ではない、一人の人間だ」と言っていた。平成十五年に姫路文学館で「森澄雄展」を開催したが、その時の「森澄雄の世界・俳句—いのちをはこぶもの」に次の一節がある。「人間はこの広大な宇宙の中の一点。人間の生もまた、永遠に流れて止まらぬ時間の中の一点に過ぎない。俳句もまたその虚空と流れる時間の、今の一瞬に永遠をとらえる大きな遊びである。老子の言う無為自然であるうか、また学を絶てば憂い無しである。人間の小さな理屈や学を捨てれば、こんな贅沢な遊びはない」

森澄雄（本名・澄夫）は大正八年二月二十八日生まれで、大学卒業後応召、ホルネオで終戦、昭和二十一年復員、一旦佐賀県の女子高校の教師となり、昭和二十三年に同じ高校の先生と結婚、その後東京に出て、豊島区の高校の教師となる。住む所が無く、学校の元作法室で他の教師と同居していた。加藤楸邨の「寒雷」には昭和十五年の創刊当時から参加していて、編集長の青池秀二の奔走

により、北大泉の一軒家に移った。三人の子供に恵まれ、昭和三十年に今の大泉学園町に移った。昭和四十五年に俳誌「杉」を創刊。

昭和六十二年に紫綬褒章、平成七年には脳溢血で倒れ左半身麻痺、平成九年に恩賜賞、芸術院会員。そして、平成十七年に文化功労章を受章した。平成二十二年八月十八日肺炎のため九十二歳で死亡。奇しくもアキ子夫人の命日八月十七日の次の日であった。

句集は全部で十五句集あるが、澄雄の場合句集の題を先の先まで決めて、その世界を指して句を作っていたのが特徴である。第一句集『雪樸』昭和21年発行では、長崎高商卒業間際の作や埼玉大忘年会での

冬の日の海に没る音をきかんとす

除夜の妻白鳥のごと湯浴みをし

第二句集『花眼』昭和44年発行で、能登での作。

磧にて白桃むけば水過ぎゆく

父の死顔そこを冬日の白レグホン

昭和四十七年に加藤楸邨一行とシルクロードへ旅した時、芭蕉の「行春を近江の人と惜しみけり」を思い、帰国してから淡海へ百五十回近く通った。これらは第三句集『浮

鷗』以降に纏められている。

秋の淡海かすみ誰にもたよりせず

昭和47年義仲寺帰りの電車の中で詠んだ。

第四句集『鯉素』昭和52年発行では、二宮の徳富蘇峰記念館で詠んだ

ぼうたんの百のゆるるは湯のやうに

西国の蛙曼殊沙華曼殊沙華

第七句集『四遠』昭和61年発行で蛇笏賞と

紫綬褒章を受章した。

億年のなかの今生実南天

朧にて寝ることさへやなつかしき

第八句集『所生』平成元年発行には昭和

六十三年アキ子夫人が亡くなられた時に澄雄の葉袋に記されていた句。

はなはみないのちのかてとなりけり

また、第九句集「餘日」平成4年発行

なれゆゑにこの世よかりし盆の花

平成七年に脳溢血で一級身障者になった。

澄雄は最後まで、ベットの中でも「大きな句を詠みたい」と云いながら一生を終えた。

薫風のみちのくはなほ翁の地

「杉」同人 今村たかし

東京都現代俳句協会

平成三十年度定時総会

一句持寄句会・懇親会

平成三十年度の定時総会及び一句持寄句会を左記の通り開催致します。お誘い合わせの上、ご出席下さいませようお願い致します。

会長 松澤 雅世

記

日時 平成三十年三月十日(土)

総会 午後二時より

句会 午後四時より(一句締切二時)

懇親会 午後六時より

会場 文京シビックセンター二十六階
スカイホール

文京区春日一 一六六・二二一

TEL 〇三ー五八〇三ー一〇〇

(文京区アカデミー施設管理課)

・JR総武線

「水道橋駅」徒歩十分

・東京メトロ丸の内線・南北線

「後楽園駅」直結

・都営三田線・大江戸線

「春日駅」直結

会費 総会・無料。句会・五百円
懇親会・六千円

特集 ◆新春詠◆

松澤 雅世 会長

橙の一つにひとつ乱気流
すずなすずしろかぎりなくフォルテシモ
柏手の数ほど積るつもる雪

松井 国央 副会長

一月や待合室の二月号
内向きに加速して行く寝正月
平穩に目づまり起きている三日

佐怒賀正美 副会長

二刀流鞘も二本や初明り
無二の世を落葉の孔の網目越し
海馬いきいきマフラーあな巻いてより

山中 正己 副会長

正眼の構へ崩さず古蟻螂
残る世を余祿と思ふ冬至風呂
迎春の詩囊を肥やすころざし

青木 栄子 幹事長

どの路地も海へと続く初明り
赤松の赤の矜恃や去年今年
それぞれの指の名やさし齋摘む

栗原 節子 副幹事長

瘦身の家系なり叔父へ賀状

陽を入れて運河きらめく小正月
ペランダの日向に開らく福寿草

山本 敏倅 総務部長

元且を咲かせるように水切りす
とか言つて双六で宇宙遊泳
次の世も独楽のまわりを回るだけ

今野 龍二 広報部長

宝船いつも誰かが落ちそうで
焼売にグリーンピースが出初式
このところ不眠のつづく懸想文

石垣 久良 会計部長

新年のカウントダウン火を立てる
控へ目に着付け済ませる女正月
出初式富士を逆さに梯子乗り

小高 沙羅 事業部長

初風のワイングラスにある夕日
七草粥沖繩の塩ひとつかみ
違うものばかり見ている初山河

長谷川はるか 企画部長

しげさや地球は初日生み落とす
あらたまの音に厚みと暖かみ
待つために時間はありぬ三ヶ日

山口 紀子 組織部長

ひとり居という静かなる初明り

初日の出何の不思議もなければども
道の駅村の元氣を買初める

長峰 竹芳 常任顧問

去年今年まだ考へてゐるロダン

恃むべき祖国は一つ初茜

善人はみんな強欲七日粥

渡辺 嘉幸 顧問

初春の銀河の水脈へ灯の点す

余生といふ未知の愉しさ初日の出

一行の詩の噴き出づる福寿草

中村 和弘 顧問

月光の殺ぎたる山か鷺帰る

地を跳ねて禿鷲の来る聖地かな

絶壁の松は傾むき鯨来る

加藤瑠璃子 顧問

見るほどに悲しくなりぬ曼珠沙華

何処からか便り来さうな星月夜

しばらくは色なき風を追うてみる

松田ひろむ 顧問

人間の皮膜ばかりを初鏡

あらたまやすまじきものに股火鉢

姫はじめまだまだですかもうですか

佐々木いつき 顧問

灯台も鳥居も沖に明の春

齋粥雪平鍋の蓋浮かす
初観音寸の秘仏に大草鞋

加藤 光樹 顧問

去年今年過ぎたることはそのままに

遅かりし窓一面の初明り

雪に嬉々止んで安心都会の子

松田 抱空 副幹事長

あら玉の富士ならではの無心かな

一月や和服ひらひらおもひだす

神さまにととのへ鏡開きなる

行川 行人 顧問

メビウスの輪がまだ解けぬ去年今年

平成の確かな時間初山河

正月という扉なり開けてみる

布施 徳子 顧問

月煌煌ワイングラスに海の音

少年の木霊を放つ冬の山

眼が重いポインセチアの明るいい日

タイゴ鉄哉 監査役

天空の熊野輿駈け去年今年

終夜乗務解き離されし大旦

初富士を前に鉄骨組み上がる

鎌守 裕子 幹事

ポケットが浅くて虹が逃げてゆく

叱られた日の腹いっぱいのいちじく
山茶花やひとひらごに弥勒仏

山崎 百花 幹事

初旅やまづありがたき両手足

食積のさいごの隅へ主婦の箸

女正月とはたつぷりと眠ること

栗原かつ代 幹事

掌のフェイクニュースや五万目囁む

人日やエコーの影のおちんちん

二日はや二人と一匹一つ部屋

中内 火屋 幹事

初鷗アナログのまま艶歌聴く

大旦時計はちゃんと動いてる

レーニンのような父が伊勢海老焼く

高田馬場句会「春」の御案内

日時 平成三十年四月三日(火)

午後一時より

場所 高田馬場駅南口F1ビル8階

兼題 「春泥」

会費 千円

申込・問合せ 山口 紀子

TEL 090-8450-4787

哀悼

長久保通繪さん

平成二十九年九月二十七日逝去

八十二歳

謹んで哀悼の意を表します

「海鳥」誌に掲載の絶筆を転載します

自句自解

新涼の軽さにありぬ白孔雀 長久保通繪

白孔雀は幸運をもたらすというミステリアスな存在である。先頃までは横浜の野毛山動物園に公開展示されていたが、野鳥による鳥インフルエンザウイルスの影響で公開中止であった。このほど解除されたというので久しぶりに会いに行った。

孤高の哲学者のような端正な姿に瞬時暑さが遠のく。酷暑を過ごしてきた心身には何もかもそぎ落とした瘦身の白さが目に沁みだ。いま急速に自分自身の磁場を失いつつある私にとってこの白色は非常に魅力的であった。白はこんなにも人の心を引き付けるものであったのかと思う。今さらながら心に沁みだ。白はもののはじめの色であると言った友人がいる。一度しかない私の微かな生は、師、友人、家族に恵まれた。かけがえのない幸運をもたらしてくれたものと思っている。

「海鳥」第52号より転載許可

第十四回 高田馬場秋句会報告

平成二十九年十月三日(火)

兼題「水澄む」・席題「数」

《高得点句》

すきさらい言わぬ天皇水澄めり 中内 火星
すき揺れ夢の数だけある挫折 棚橋 麗未
栗の実の数に合わせ切る羊羹 敏守 裕子
数学の無い国きつと天高し 小笠原 至
水底に戦禍眠らせ水澄めり 高橋 透水
《参加作品》(順不同)

数々の浮名残して雁渡る 宮川 夏
水澄むや母のあのころマダムジュジュ 白石みずき
水澄みてスカイツリーを置く川面 松本 秀紀
歌うように数える子どもいわし雲 櫻木美保子
水澄むや友逝く空の桔梗色 広田 輝子
小四の算数解けぬ栗ごはん 小高 沙羅
水澄むや妣には妣の洗かた 栗原かつ代
数珠玉のしゃりしゃり母の手あそびに 赤澤 敬子
酒肴数多を供え頼宗忌 山中 正己
水澄んで七十歳の無駄使い 今野 龍二
数合わせひいふうみいちやん子猫ちゃん 上野 貴子
未知数はいまだ未知数木の実落つ 上野 英一
初期化して一汁一菜水澄めり 相沢 幹代

とびぬけて読めない秋の乱数表
水澄みし水面にそつと風覗く
泥水の戦沈める水澄める

(山口 紀子・記)

編集後記

平成二十九年十一月二十三日現代俳句協会創立七十年記念大会は帝国ホテルにて執り行われた。第一部のシンポジウムは当代きつての論客を揃えて「季語」についての論考は会場を唸らせる非常に聴きごたえのあるものであった。今年には都区協の三十五周年記念大会である。

「参加してこそ」都区協が動く。俳句大会もある、多くの会員の投句をお願いする。特別企画として諸家の新春詠を掲載した、皆様の新春詠の参考になれば幸いです。

御健吟をお祈りする。 今野龍二

振替番号は左記のとおりです。

〇〇一〇一五―五三九六一九

東京都現代俳句協会

広報部・編集室 〒121-0813

足立区竹の塚一―二八―一七

今野 龍二方

TEL・FAX〇三―三八五九―九三〇四

Eメール r.imano563@gmail.com